

今週の為替相場見通し(2023年12月4日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		146.66 ~ 149.67	146.81	145.50 ~ 149.50
ユーロ	(ドル)		1.0829 ~ 1.1017	1.0884	1.0700 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		159.65 ~ 163.71	159.75	157.50 ~ 161.00
英ポンド	(ドル)		1.2592 ~ 1.2733	1.2709	1.2400 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	186.20 ~ 188.53	186.62	185.00 ~ 190.00
豪ドル	(ドル)		0.6567 ~ 0.6675	0.6675	0.6560 ~ 0.6740
(1豪ドル=)	(円)	*	97.24 ~ 98.50	98.01	97.20 ~ 98.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1) 今週の予想レンジ: 145.50 ~ 149.50 円

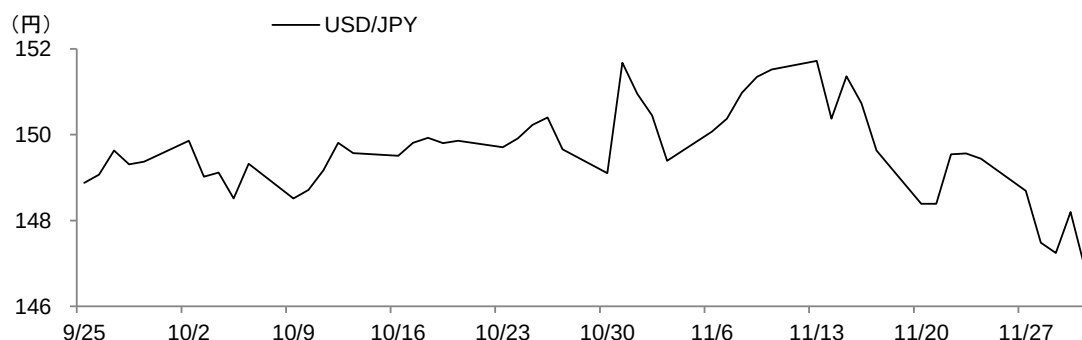
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

11月27日週のドル/円は下落した。149.56円で週明け東京市場をオープン、直後につけた149.67円が週を通しての高値に。実需の売りを中心に149円の大台を割り込む。北米時間にはクロス/円の売りに続落し、148円台半ばまで押される。28日は東京市場で一時148円を割り込むところまで下押しも、売り一巡後は148円台後半まで回復。ただ、北米時間に米FRB高官の発言を受けて米金利が低下するとドル全面安に、147.50円を割り込む。翌29日も下押し圧力が続き、ストップを巻き込みながら146.68円まで下押し。その後は北米時間に148円台目前まで回復するも勢いなく失速。30日の東京市場では147円ちょうど近辺で横ばいだったが、海外時間へ渡ると148.50円レベルまで上伸。週末は北米時間に米11月ISM製造業景況指数の下振れに147円台前半まで下押し。その後も欧米の債券利回りが低下する中、146.66円の週間安値を示現し、146.81円で越週となった。

12月4日週のドル/円は下値の堅い展開を想定。米5年債の入札が堅調な結果となり、金利が低下していたところにウォラーFRB理事のハト派な発言を受けて一段と金利は低下。OIS市場に織り込まれている来年のFFレートの利下げは4回となり、ドル/円は146円台を見る格好となっている。11月13日につけた年初来高値である151.92円を起点とすると5円超のまとまった値幅の調整となっている。また、週末のパウエルFRB議長会見では「緩和を憶測するのは時期尚早」としながら「政策金利は景気抑制的な領域に深く入った」などと発言し、ハト派・タカ派どちらかに傾倒することなくバランスをとった内容となっている。為替では米金利のピークアウトが市場のテーマとなっており、結局のところは利下げ織り込みが今週一段と進むか？という点に問題は集約される。すでにまとまった値幅で調整が入っており、ハト派とは受け取られなかった議長の発言を見ても、下値押しは一旦小休止か。経済指標では5日(火)に米11月ISM非製造業景況指数、8日(金)の米11月雇用統計などが目玉。また欧州指標軟調からの欧州金利低下、クロス/円下落からのドル/円軟調というリスクシナリオも頭に入れておきたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/27~12/1)の値動き: 安値 146.66 円 高値 149.67 円 終値 146.81 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 部坂 洋太郎

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.1000 157.50 ~ 161.00 円

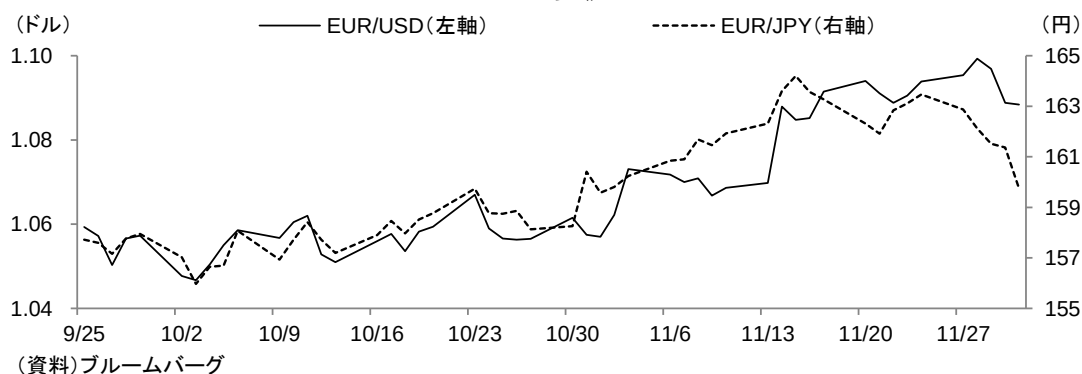
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、米金利低下を背景としたドル売りの流れの中、約3か月半ぶりの高値を付けるも、その後は反落となった。週初27日、1.0938でオープンしたユーロ/ドルは、感謝祭明けで流動性も乏しいなか1.0940近辺で方向感の乏しい値動き。その後、ラガルドECB総裁によるユーロ圏の経済減速に関する発言を受けて一時1.0925まで下落したがその後は買い戻され1.0954でクローズ。28日、米金利が大幅低下するなかユーロ/ドルは約4か月ぶりに節目の1.10台まで一時上昇したのちに高値圏で引け。29日、ユーロ/ドルは前日からのながれを引き続き1.10台の高値圏で推移するも、独11月消費者物価指数の結果を受けて、1.09台後半まで下落となった。30日、仏11月消費者物価指数の結果が下振れとなったことや米金利上昇を受けて欧州時間以降に大幅下落となり1.0879まで下落となった。1日、ユーロ/ドルは1.09ちょうどを挟んで推移するなか欧州時間にECB理事メンバーであるビルロワドガローによる「2024年中に利下げを検討する可能性がある」とのハト派発言を受けて週安値である1.0829まで下落。その後はパウエルFRB議長の発言を受けてドル売優勢になると買い戻され、1.0884で越週した。

今週のユーロは上値が重い展開を予想する。30日(木)に発表されたユーロ圏11月消費者物価指数の結果は、前年同月比+2.4%と7か月連続で伸び幅が鈍化となり、インフレ基調が失速していることを確認できた内容だった。この結果を受けて、14日(木)開催予定のECB政策理事会に関しては利上げ見送りがほぼ確実視される状況となった。また、欧州域内の実体経済に関して、ユーロ圏内の企業の借り入れ需要は大幅に後退しており欧州域内経済はこれまでの利上げ効果が徐々に現れている。また、1日(金)にはECB理事メンバーから2024年における利下げに関する発言もあり、早ければ来年4月のECBにおける金利引き下げも今後織り込まれ、ユーロ売りの流れが優勢になると予想する。今週の重要指標の発表は5日(火)にユーロ圏10月生産者物価指数、6日(水)ユーロ圏10月小売売上高、7日(木)ユーロ圏7～9月期GDP確報値などの発表が予定されているが、値動きの大きな材料とはならないだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/27～12/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.0829 高値 1.1017 終値 1.0884
(対円) 安値 159.65 高値 163.71 終値 159.75



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2800 185.00 ~ 190.00 円

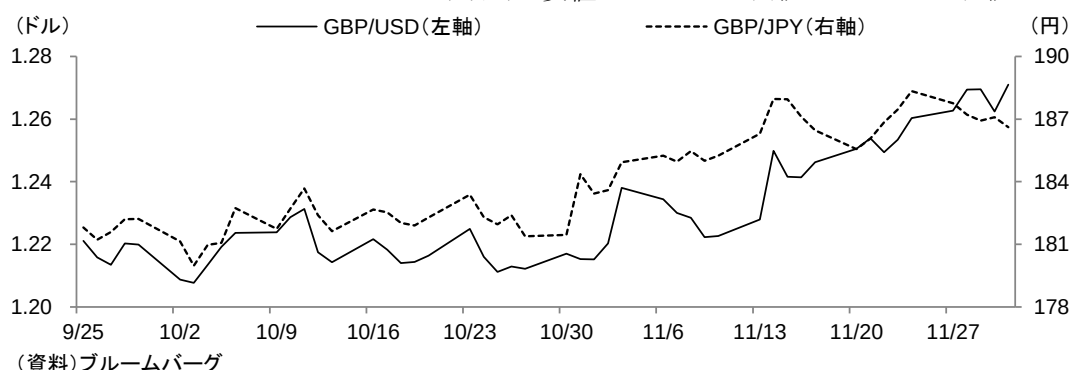
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は、週前半にかけて上昇が継続し、今年9月初旬以来となる対ドル1.27に達した。週後半には11月30日発表のユーロ圏11月CPI速報値の市場予想大幅下振れを受けたユーロ売りに巻き込まれる形でポンドも対ドル1.26まで調整したが、金曜日の引けにかけて再び1.27に向けて上昇している。他のG10通貨と比較した値動きはまちまちであり、対円では下落、対ユーロでは上昇した。英国個別の要因では、イングランド銀行(BOE)の高官による発言が相次ぎ、総じて市場の早期利下げ観測を後退させる内容だった。グリーン氏は11月30日に、英国の現在の政策金利は考えていたほど景気抑制的ではない、と発言した。ハスケル氏は英国の低い失業率が賃金の伸びを高止まりさせ、強い政策金利の対応が必要になる可能性を高めると12月1日にタイムズ紙のインタビューで語っている。両者は11月のBOE会合で追加利上げ票を投じている。11月29日に講演したベイリーBOE総裁は、上述の2名ほどタカ派的ではないものの、今後数か月以内の利下げ期待を改めてけん制している。11月28日に講演したラムズデンBOE副総裁も、英国のインフレが一段と「国内に起因する」ようになってきたと述べ、インフレを「システムから排除することは困難だろう」との見方を示している。

今週1週間のポンド相場は引き続き、英国個別の要因では材料不足の感が否めない。対ドルでは12月8日に控える米11月雇用統計次第、となろう。一方、対ユーロでの値動きも注目だ。11月30日発表のユーロ圏11月CPI速報値は前年同月比+2.4%と10月の同+2.9%から大幅に減速し、市場予想の同+2.7%をも大幅に下回る結果となった。市場が2024年3月の欧州中央銀行(ECB)の利下げを完全に織り込む中で、ユーロは大幅下落となった。市場では早くもFRB、ECB、BOEの利下げのタイミングに焦点が当たっているが、今回のユーロ圏CPIの結果を受けて、ECBが先頭を走っているという認識が市場で一段と強まっている。エネルギー価格の動向やEU域内における補助金撤廃の方向性を考慮すれば、先行きユーロ圏CPIは再上昇する可能性が高いものの、ユーロ圏景気の減速ぶりを考慮すれば、ECBに対する利下げ期待が大幅に後退するシナリオも考えにくい。上述の通り、BOEはタカ派姿勢を堅持しており、対ユーロで見たポンド相場は支えられる公算が大きい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/27~12/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.2592 高値 1.2733 終値 1.2709
(対円) 安値 186.20 高値 188.53 終値 186.62



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6560 ~ 0.6740 97.20 ~ 98.50 円

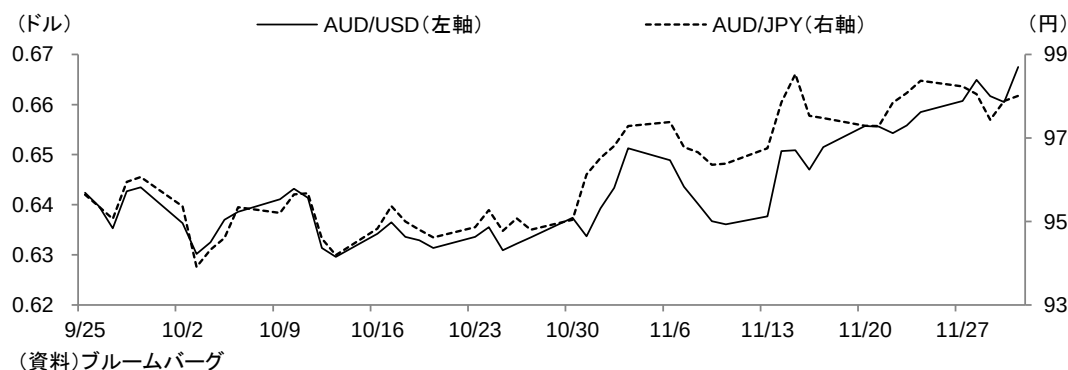
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週は0.6567~0.6676のレンジで振幅した。27日は0.6581でスタート後、米長期金利低下でドル売りの流れを背景に0.66台へ乗せ。28日は豪10月小売売上高は下振れも下げは限定的。ブロックRBA総裁が予想を上回る経済需要がインフレ圧力上昇に寄与していると述べた事で0.6632まで上昇した。ウォラーFRB理事(タカ派)が「インフレ率を2%に戻す上で政策が現在、好位置にあるとの確信を強めている」とハト派の認識を示した事で米債利回りが低下すると、ドル売りから0.6666まで上昇。29日は豪10月CPIが予想以上の下げ幅を見せた事で12月RBA会合での追加利上げ確率が低下し、0.6637まで下落。但し高熱費や家賃の伸びが未だ強い事から12月RBA会合ではタカ派スタンスを継続させるとみられ上昇に転じた。またNZ中銀が声明で予想外のタカ派スタンスを見せた事でNZドル買いが先行し、豪ドルも0.6676まで連れ高となった。フローラ巡後は下落。30日は月末フローが交錯する中、複数の米経済指標が下振れるとドル売りとなり0.6619へ上昇。その後2名のFRB高官からタカ派コメントが相次ぎ、ドル買いから0.6570近辺まで下落。1日は0.66台を死守しながら0.66台前半で振幅後、パウエルFRB議長が「引き締め不足と引き締めリスクは一段とバランスがとれてきている」と12月FOMCでの金利を据え置きの可能性を示唆し、来年の利下げ観測が強まり米国債と株式が上昇。米国債利回り低下からドル売りを背景に0.6670台まで踏みあげられ、0.6675で越週。

今週は5日(火)RBA会合、6日(水)豪7~9月期GDP、米11月ADP雇用統計、7日(木)豪10月貿易収支、中国11月貿易収支、8日(金)米11月雇用統計、米12月ミシガン大学消費者マインド、及び1年期待インフレ率等が発表予定。先週はブロックRBA総裁が粘着性のあるインフレに警戒感を示し、豪ドル買いが先行したが、直近の豪10月小売売上高、豪10月CPI、豪11月コアロジック住宅価格等が相次いで下落している為、5日(火)のRBA会合では広く据え置きが予想されている。但し一部では単月のCPIは各四半期の最初の月でカバーされる商品の比重が大きく、サービス価格の動向が然程反映されていないと指摘されており、サービス部門インフレが継続しているかを慎重に見定める必要があるとの声もある。故に12月会合で据え置きとなっても、来年2月会合での追加利上げの可能性が残る為、今後の経済データと共に今回の声明文に注目したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/27~12/1)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。